

『カリスタ』にみるニューマンのパーソナリズム

——その一考察（４）——

長 倉 禮 子

A Study of Newman's Personalism in *Callista* (4)

Reiko NAGAKURA

It is said that Newman's whole approach to the great questions of religion is both personal and concrete. He also insists that it is by means of personal influence that truth, as well as religion, is propagated. According to Newman, truth is attained by the whole person, and the essence of religion is one's personal relationship with the Divine Being. Since his so-called first conversion at the age of fifteen, he lived an intimate intercourse with the living God and realized that one's assent to the existence of God is much more than a mere concept.

In *Callista* a Greek girl, who is growing up towards God in love, is dynamically delineated in the most personalistic way. We may safely say *Callista* is the work born from Newman's innermost ethos, and that his living experience of "myself and the Creator" arising from his inner-self has born fruit exquisitely in this work.

Keywords: personalism(パーソナリズム), conscience(良心), Incarnation(受肉), Agape(アガペー), grace(恩寵)

I 序章

1. はじめに
2. あらすじ
3. 物語の舞台設定、描写、構成等について

II カリスタの人物像とその人格形成

1. カリスタの人物像
2. カリスタの人格形成の基礎
3. カリスタの人格的統一の深化

III カリスタの内的変化から人格的完成へ

1. カリスタの内的変化
2. 自己との出会い
3. イエスとの出会いへ
4. 人格の完成——（殉教）

（以上第24号、25号、26号掲載）

IV 『カリスタ』にみるパーソナリズム

これまでカリスタの人格完成への道程を詳しく分析・考察してきたが、著者ニューマンはカリスタを

しっかりと自我に目覚め、主体性の確立し価値に向かって成長し成熟していく一個の生きた人物として描き切っていた。カリスタは個性ある人格を備えた人物であった。そしてその人格は内部から成長発展しようとする生命を持ったもので、自分とは別の、自分の外にある、絶対的な人格的対象を求めて成長していったのであり、最後に彼女は最高の自己統一を遂げてその人格を完成させたのだった。

本稿では、まずニューマンの人格の捕らえ方について論ずる。次いで前稿までの分析にもとづいて、超越的人格へ向かうカリスタの人格の内的要因について考察する。これまで分析してきたことによれば、彼女の人格的成長を促した内的要因は、彼女の心に語りかけていたいわゆる「心の中の声」と彼女自身の「魂の憧れ」であった。ニューマンは「心のなかの声」を conscience (良心) と呼んでいるが、「魂の憧れ」はニューマンの言葉によれば“two and two only absolute and luminously self-evident beings, myself and Creator”⁽¹⁾つまり、「神と我」の問題である。従って二番目には「良心」を、続いて三番目に「神と我」の問題を取り上げる。次にニューマンのパーソナリズムの中心であるといわれる「受肉」

(Incarnatio)の問題⁽²⁾を考察する。カリスタがその魂の憧れを完全に満ちし、人格の完成を達成したのは、絶対的な愛である人格と出会うことによってであり、彼女の出会ったその人格は「受肉した神」に他ならなかったからである。以上のことは拙稿(1)で述べたいいわゆる縦の線に当たるものである。また我々はカリスタが人格的に成長していく過程で様々な人が影響を与えたのも見てきた。これは物語における横の線に当たるものである。先の縦の線とこの横の線とは相互に作用し合いながらカリスタの人格を止揚させていくのであり、この二つの線が交差するところ、つまり、愛と赦しの神と出会うところで彼女の人格完成は達成されたと言ってよからう。筆者はそこに『カリスタ』におけるパーソナリズムを位置づけたのであった。最後にアガペーと恩寵の問題にも触れておきたい。さまざまに論じられる本書の「愛」のテーマの根底に、筆者はパーソナリズムを認めてこれまで論を展開させてきたが、本書に見るニューマンのパーソナリズムはこれらの問題とも密接に関わっているからである。

1. ニューマンによる人格の概念

我々は日常の経験から人間はそれぞれ「独自の人格」を持っているということを自明のこととして受け入れ行動している。我々はまたある個人が自分にだけ特別のものと感じている特性、またはその人の存在をそれによって自ら確認するような特性をその個人以外の人と区別する「独自性」として受け入れている。ところがさて「人格とは何か」と問われると、それに答えることは容易ではなく、それには様々な価値観や異なった立場からの多義的な説明や答が可能になる。しかしごく一般的な「人を人たらしめている本質ないし価値」を意味する場合、その人がある統合された存在として自分の意志を持ち、その結果に責任を取るような存在としてその人を「個人」として我々が認識できるその人独自の存在、それを「人格」と呼んでいる。⁽³⁾

シシリアスがカリスタに、人間存在の本質は何よりもまず「私」と言えるものであり、人間はこの「自己」から永遠に逃れられない存在であると語っているように⁽⁴⁾、人間には自分を自分として確認できる根拠として自己(self)についての認識があり、自己実現の体験がある。我々はまず我々であることを認めざるを得ないのであり、この「私」という事実から逃れることはできない。ニューマンにとってこの「自己の存在」と「自己知」(self-knowledge)は、神の存在や他の一切の真理の認識にかかわる問題においては勿論、人格的成長を遂げることににおいても絶対的な出発点となっている。⁽⁵⁾ニューマンは、我々は自分の存在それ自体を直接に知ることができないが、人間が本来持って生まれた「考える」(thinking)、「感じる」(feeling)、「記憶する」(remembering)、「比較する」(comparing)などの精神的な働きから自分は確かに存在するということを意識することができると言う。我々は自分の存在を信じるとは言わないし、自分の意識を信じるとも言わない。このような精神的な働きは存在そのものと不可分であって、いかなる推論にも先立って「意識」と言う一つの行為によって存在そのものと一つのものとして納得されるのである。⁽⁶⁾

またニューマンは、人間は自己の本性及び資質を自ら変えるわけにはいかないが、完全性と善に向かっ

て進歩していくものであるとしている。⁽⁷⁾動物と違って、人間は生来与えられている能力を使うことによって完全性と善に向かって進歩していくのであるが、その能力というのは内面に宿した霊的・精神的な生命であって、それによって徐々に自己実現をしていく存在である。⁽⁸⁾しかし、人間の内面の成長というものは決して機械的に行われるものでも必然的に達成されるものでもない。それは各人の個人的な努力にかかっており、人は一人一人その本性の中にそれを完成させていく特権を生来与えられているのである。人間の精神は本来成長していく生きた内的生命であり、その生命によって自らの完全性に向かって発展していくものであるが、人間は自らの創造者でもある。この自ら自己完成に向かっていく存在であるということこそ人間に与えられた特権であり恵みであり、それゆえにこそ人間は責任ある存在でもある。それだけでなく、自らに与えられた性質によって自己発展を遂げていかなければならないということは人間存在の法則でさえある。ニューマンによれば、人間の本性の中にはそれが将来成長発展していくものとしての種、または将来に対する約束 (promise) のようなものがあるが、それは盲目的に法則に従って発展していくようなものではなくて、人間は自由に自らの活動によって自己実現を果たしていく断固として自分で自己を形成していく存在 (self-made) である。各個人は本来付与されているあらゆる要素を自由に受け入れ従うことによって未発達な自己を開花発展させていくのである。その自己発展は完全に自由な意志にもとづいて達成されるもので、それはまた人間の本性と一致した人間に本来備わっている「人間存在に特有な法則」に従って為されるのである。⁽⁹⁾人間は自己の能力の様々な機能、とりわけ人間に特有の能力である思考を通して自己を認識する存在であるのだが、人間はまた自分の行いが誠実であるかどうか、良心的であるか否かを告げる心の中の声によっても自己の存在を疑い得ない事実として意識するのである。人間は心の中に勧めまたは禁止などの声を聞き、それに従うか否かによって咎めまたは賞賛を自分自身の内に感じるが、それは同時に自己の存在を認識せしめるものでもあるのである。⁽¹⁰⁾

いかなる時代のいかなる民族にも恩寵の助けを受けない理性というものはなかったとニューマンは確信しており、人間には初めから神の本質と神に対する人間の義務についても啓示があり、いわゆる異教といわれる世界でも、敬虔な人々の心の中に宗教的な信念があったとしている。⁽¹¹⁾したがって異教の少女カリスタのなかにもこうした原始啓示が刻まれていたと前提することができる。その芽生えと成長はどの程度までが彼女の自然の性向により、どの程度までが上からの恵みであったのか、または知性の要求が彼女をそこへ導いたのか、それとも彼女が心の中の声に忠実であったためにそこまで導かれたのかなど、こうした一つ一つの面を分析することは非常に難しい。しかし、カリスタはキリスト教徒のカイオーニの言葉に喜んで耳を傾け、心の中に既に蒔かれていた種を芽生えさせ、その芽生えた種を大切に育て、アジュリアスやシシリアスとの出会いを通して更にその芽を成長させ、遂にキリストとの出会いへと結実させていったのであった。その成長はいわば生命を内に宿した種が大地に蒔かれ、日夜起き伏しするうちにいつの間にか芽を出し、葉をつけ、葉を茂らせ、実を結んでいくのに例えられていた。⁽¹²⁾物語全体を単純に眺めた時、カリスタは「愛に対する渇き」によって成長していき、「愛の招きに応える」ことによってその人格を完成させていったことを我々は改めて思い出す。それは最初に蒔かれた種にあくまでも忠実に、しかし自律的に、自己の意志によって開花発展させていった結果であった。カリスタが与えられた本性に従って自由に本来の姿へと成長していくためには良心が大きな役割を果たしていたのである。

2. 良心

カリスタは「これをしなさい」または「あれをしなさい」とか、「これをしてはならない」または「あれをしてはならない」という命令や禁止のような、あるいは指図のようなものを心の中に感じていた。それに従わなかった時には心に苦さや不安のような感じを覚え、逆にそれに従った時には心の平安や喜びのようなものを感じるのであった。心の中の命令や禁止のようなものは人によって、または場合によって変わり得るし、間違いも可能である。しかし、その声に従わなかったときの心の苦さや不安は変わら

ないで残るものである。こうした心の現象をニューマンは“moral sense,” “sense of duty,” “judgment of the reason,” “magisterial dictate,” “guidance of life”などという言葉で表現しており、⁽¹³⁾これらの表現は英語のいわゆる‘conscience’、そして日本語の「良心」と言われている言葉と通ずるものである。⁽¹⁴⁾

ニューマンによれば、良心は人間性の一部であり、良心を経験することは自分の存在それ自体を経験するのと等しく不滅のものである。⁽¹⁵⁾「私」という存在は「私の良心」に対して「良心的な」行為であるかどうかという訴えを起こすことによって「自分という存在がある」ということを明らかにしていると言えるのであるが、余りにも自明のことであるために却ってこの事実は軽視されてしまいがちである。しかし、まさにこのことが自分とは別の、自分を越えた超越的な「人格」を認めざるを得ないように我々に迫る根本的な事実なのである。⁽¹⁶⁾

ニューマンは良心には二つの面があることを認めてこの二つの面を区別している。⁽¹⁷⁾一つは人によって変わり得る面で、この変わり得る面を倫理規範 (ethical code) の基礎であるとする。確かに人は教育によってもその生まれ育った環境やさまざまな状況によっても正しいこととそうでないこととの基準は変わり得る。しかし、カリスタがそうであったように、その決断を道徳的に拘束するような権威ある存在をも人は心の中に感じるのである。換言すれば、人は心の中に監視者 (the dictate of an authentic monitor) のようなものを感じていてその存在を否定することができない。良心のこうした面は外的条件の如何によらず万人に共通で変わらないものである。ニューマンはこの権威ある監視者とも言うべき存在を「神」と呼ばれる絶対的で超越的な人格が存在しなければならないことを証明するものとしているのである。⁽¹⁸⁾そしてこの「道徳的な拘束」 (moral sanction) が、人間の意識 (consciousness) と存在 (being) と結びついているが故に、良心の最も根源的かつ権威のある面であるとするのである。⁽¹⁹⁾従って、人間は自己の存在を疑い得ないと同様に、人を道徳的に拘束するある存在をも疑い得ないとする。⁽²⁰⁾そして良心はそれが人間を道徳的に拘束するものであるので、とりわけ自己の存在を意識する特権ある位置を占めると言うのである。⁽²¹⁾

良心は個人的に人間を導くものであり (a personal guide)、他の如何なる知識よりも自分自身に近いもの (Conscience is nearer to me than any other means of knowledge.) である。⁽²²⁾この道徳的な拘束は、自分の心の内側にありながら人は自分とはまったく別の自分の外にある或る存在に対する義務のようなものとして経験するのである。カリスタは「これをしなさい」とか「あれをしてはならない」とか自分のなかで命じたり禁じたりしているのは、この自分のなかに居られる人格的 (personal) な存在であると言っている。⁽²³⁾それは単に人間の本性に由来する義務観のようなものではなく、自分のなかにありながら自分の外にある、自分とは別の人格 (person)、否、神的な起源に由来するとさえニューマンは言い切っている。⁽²⁴⁾カリスタの言葉を再び引用しよう。

“I feel that God within my heart. I feel myself in his presence. He says to me, Do this don't do that. You may tell me that this dictate is a mere law of my nature, as is to joy or to grieve. I cannot understand this. No, it is the echo of a person speaking to me. Nothing shall persuade me that it does not ultimately proceed from a person external to me. It carries with it its proof of its divine origin. ” (p. 314)

カリスタは「良心」イコール「神」と言っているのではなく、“the echo of a person speaking to me”と言って、自分とは別の人格の自分の人格への語りかけであると言っているのである。⁽²⁵⁾また、カリスタがその心の中の声に従う時に感じる満足感や、それに従わなかったり反対したりした時に感じる悲しさなどは、尊敬する人に対する行為に対する反応と同じであり、心の声の主は、一個の人格として感じられると言うのである。このカリスタの言葉をニューマンは *Proof of Theism*⁽²⁶⁾において、「思想を意識することが存在を暗示する反省行為であるように、良心で感じることは義務を負わせる外的なある存在があるという概念を伴った拘束または責務を認めること、是認することである」と説明している。⁽²⁷⁾

そして、こうした感情を生じさせる人間の心の特性に対してニューマンは、‘conscience’という名称を与えているのである。⁽²⁸⁾これは我々が美しいとか醜いとか感じる感情とはまったく異なり、あたかも親や友人や他の人間に対して、悪を行った時には悲しみを、正しいことを行ったり、その人を喜ばせたりした時には満足を感じるような、「人格」に対して感じるのと同様の感情なのである。こうした良心の感情には、将来に受けるであろう「審判」という概念も伴うものであるとも言っている。⁽²⁹⁾ニューマンによれば、良心は人間行為の善悪を認識する単なる道徳感覚に留まるのではなく、他の知的諸感覚とは類を異にした絶対的義務感覚である。このことは、良心によって実存的に把握された対象が生命のない存在ではなく人格的存在であるということを示しているのである。⁽³⁰⁾

『承認の原理』においてニューマンは、良心は良心を超えるものを志向しているのであり、人間は自己決定に際して自己を超える何らかの拘束があることを漠然とではあるが認識するのだ⁽³¹⁾と言っているが、これがカリスタをして「声」と呼ばせたものであり、我々の心の中に「命令」と感じさせる体験ともなるものである。しかし、我々自身の体験からもわかるように、良心の声に従えば従うほど良心は研ぎ澄まされ、良心の示すところに従えば従うほど、今までぼんやりとしていた心の中の声はいよいよ冴え渡って響き、人間としての威厳に添った生き方をすれば、それだけ我々の中における神の存在もまたはっきりしてくるのである。⁽³²⁾このように人間は無限のものに対する無限の憧れを持ち、そこへ向かって開かれたものとして無限に豊かに成長できる存在なのである。そしてこのことは人間存在それ自体と完全に一つであり、我々の存在自体に由来するのである。⁽³³⁾従って、人間の神についての知識は人間存在そのもののの中にあって非常に現実的なものである。神の存在についてのこうした人間の知識は偶然のものでも表層的なものでもなく、人間の内面に形作られている自然で自発的な性質の結果なのである。⁽³⁴⁾科学的な知識は数において増していくが、人間存在の中心に向かっていく運動としての知識は、人間の精神を拡大させ成長させるものである。それ故、学問のないごく普通の単純な人であっても、その人が自分の本性と不可分に一致している良心の声に忠実に従って生きる時、その人はまったく内的な人となるのであり、我々はそのような人を信頼することができるのである。⁽³⁵⁾このようにして得た神についての知識は生命のある生き生きとしたプロセスによって到達した知識であり、概念的認識とはちがって非常に現実的であり個人的（personal）である。⁽³⁶⁾

3. 神と我

カリスタが心のなかに絶えず感じていた憧れというのは、彼女自身を遙かに凌駕する無限なものに対する魂の果てしない渇きであり、彼女の理性・意志・情熱そして彼女自身の存在そのものを隅々までも限りなく満たしうるような存在に対する魂の渴望であった。そして我々はそこに魂の憧れの対象としての人格的存在の必要性が（いや、必然性と言ったほうがよいかもしれないが）暗示されているのを見てきた。カリスタにおいて「心のなかの声に従う」ということは単なる道徳的な義務観ではなかったし、または抽象的な倫理観でもなかった。それどころか彼女には全身全霊をあげて愛することのできる対象が必要であった。彼女は自分を越えた絶対的な対象、決して裏切られることのない自分の全人格全存在をかけて関わっていくことのできる対象への愛に促されていたのである。それは哲学者の言うような理性による神の存在の是認でもなければ、倫理学者の言う心の通わない冷たい道徳観でもなかった。また自然宗教の何か抽象的な存在に対する畏敬の念とも違っていた。⁽³⁷⁾彼女の心のなかには良心の声を聞きそれに従うという理性と意志の働きと同時に、人間に対してそうであるのと同じく、ある「人格」に対する親密な「愛の感情」が働いていたのである。ニューマンは、良心は豊妙で(subtle)、精神的(spiritual)な目に見えない作用(invisible influence)であるが、常に「感情」(emotion)であると述べている。⁽³⁸⁾美しいものを見た時に人間が体験するのはむしろ知的な喜びといったものであるが、対象が人格を持っている場合、人間の感情は刺激されて愛情へと変化していくのだと言う。⁽³⁹⁾こうしてニューマンは、良心は常にその感情がそこへと向かっていく生きた対象との関係を暗示するものとし、良心の感受性(feeling)の感情的(emotional)な面を次のように分析するのである。我々は良心の声に従わなかったり、

それに背いたりしたときに、責任を感じたり恥ずかしく思ったり怯えたりする。このことは、その方にたいして責任を負い、その方のまゝに自分を恥じ恐れを感じる「あるお方」が居るのだということを暗示する。また悪いことを行ったときには、母親を傷つけたときの経験にも似て、我々を圧倒するような、心も張り裂けんばかりの悲しみを感じる。それに反して、正しいことを行ったときには心に平和を覚え、父親から誉められたときのような満足感のある喜びを感じるのである。このように、我々は確かに心のなかに「ある人格的な存在」のイメージを持っているのである。そして、そのような人格的なイメージに対する我々の愛と尊敬の思いは、我々に向けられるその方の微笑み⁽⁴⁰⁾として感じられ、我々はそのなかに幸せを見出すのであり、その方にたいして憧れを持ち、その方に嘆願し、その方の怒りを恐れしたりする。⁽⁴¹⁾従って、我々の内なる感情は、以上見てきたような感情を引き起こさせるある知的な存在を必要としていると言える。人間は厳密な意味では石ころに対して愛情を持ったり、犬や馬のまゝで恥ずかしく思ったり、単なる人定法を破っても後悔や良心の呵責にさいなまれるというようなことはない。しかし良心は後悔や良心の呵責といった感情とか、混乱、胸騒ぎ、自己譴責というような感情を起こさせ、それと同時に、地上の如何なるものによっても引き出すことができないような深い平和、安心感、委託、そして希望をも与えるのである。⁽⁴²⁾

様々な試練を経て内面の変化を経験し、遂に信仰によってイエスという一つの絶対的な人格と出会った時、カリスタのなかに際立っていたのは肉体の苦痛や死への恐怖をも凌駕するほどの内的静けさ、心の平和であったのを我々は見た。今一度そのくぐりを見てみよう。

She had passed through doubt, anxiety, perplexity, despondency, passion, but now she was in peace. Now she feared the torture or the flame as little as the breeze which arouse at nightfall, or the busy chatter of the grasshoppers at the noonday. Nay, rather, she did not think of torture and death at all, but was possessed by a peace which bore her up, as if bodily, on its mighty wings. . . . (p. 354)

ニューマンは我々のなかにある無限のものに対する魂の憧れである道徳的感情のダイナミズムと、そのような感情が「至高的人格的存在」を示しているといつて、これら二つの面、つまり「良心」と「神と我」という二つが実は一つに繋がっているのだということを指摘する。⁽⁴³⁾人間の魂が無限にして至高なる人格(Supreme Person)に向かっているときにはじめて全人的な成長が行われるのであり、そうでない限り人間の心が真に開かれるということはなく、従って真の意味での人間の成長もあり得ないというのである。また同じく至高的人格的存在を心のなかに宿しているときにはじめて人間の心は本当の意味で開かれたものとなり、その方に導かれて人格的な発展を遂げていく。⁽⁴⁴⁾そのような至高の人格は、私を導く方であり、全てを知り、全てがお出来になると同時に、審判者であり、懲罰を下す方でもある。そのような方はまた、「父」として認めることも出来る方である。それは我々は心の働きのなかに、その方にたいして親や目上の人々にたいして感じると同様な感情を感じるからである。⁽⁴⁵⁾

以上見てきたように、ニューマンによれば、良心の声というのは、自分を超越するある人格的な至高で絶対的存在を想定させるものであり、それと同時にその声に従い、または反対する我々の態度もまた人格的な行為であるということである。⁽⁴⁶⁾つまり、人が自分のなかに自分を超越するある人格的な存在を感じ、その存在にたいして人格的に応えていくというプロセスは、「我と汝」の、いやむしろ「神と我」のパーソナルな関係にほかならないのである。⁽⁴⁷⁾

4. 受肉の奥義

カリスタの魂が全身全霊を挙げて愛すべき対象を求めてさ迷っていた時、彼女と出会ったシシリアスが「愛は対象を必要とし、その対象はまた人格的なものである筈である」と語ったのを我々は既にみってきた。次いで我々はシシリアスが世にも珍しい「歴史における一つの出来事」を彼女に語ったことも思

い出す。それは、「愛は肉体をとって我等のうちに宿りたもうた」ということであった。その「出来事」は人類の歴史における最重大事であったばかりか、我々一人一人にとっても、カリスタ個人にとっても重大な出来事であった。なぜならその「受肉」(Incarnatio)は我々一人一人を、またカリスタを、「個人的」に愛する「愛の受肉」であったからである。⁽⁴⁸⁾その方は我等を愛し、我らとともに生きるために「肉体をとって我等のうちに宿りたもうた」(John 1: 14)のであるが、それは我等に対する愛によって死ぬためでもあり、実際その方は愛においてご自分の命を捧げられたのだ。その方は我々を完全に満たしうる「唯一の方」であり、我々一人一人のために死んでくださった「真実なる愛」そのものであった。⁽⁴⁹⁾

聖パウロはアテネに来たとき、この町の至る所に『知られざる神に』捧げられた祭壇や偶像を見た。彼はまた何人かの哲学者たちと討論もしたが、そのあとで彼らが「知らずに拝んでいるもの」は、実は世界とその中の万物とを作られた天地の主、神であるということを知らせようと、アレオパゴスの真ん中に立って次のような説教をした。

この神は天地の主ですから、手で作った神殿などにはお住みになりません。また、何か足りないことでもあるかのように、人の手によって仕えてもらう必要もありません。すべての人に命と息と、その他全てのものを与えてくださるのは、この神だからです。神は、一人の人からすべての民族を造り出して、地上の至る所に住ませ、季節を決め、彼らの居住地の境界をお決めになりました。これは人間に神を求めさせるためであり、また、彼らが探し求めさえすれば、神を見出すことができるようにということなのです。実際、神は私たち一人一人から遠く離れてはおられません。皆さんのうちのある詩人たちも、

『我らは神の中に生き、動き、存在する』

『我らもその子孫である』と、

言っているとおりです。わたしたちは神の子孫なのですから、神である方を、人間の技や考えで造った金、銀、石などの像と同じものと考えてはなりません。(Acts 17: 22-29)

聖パウロはこうして、神は天地の主、万物の創造主として「超越者」であるばかりでなく、遍く存在する「遍在者」であると述べたあとで、この神は「イエスを死者の中から復活させて、すべての人にそのことの確証をお与えになった」と語った。彼が宣言し伝えていたのは、その「死んで復活した神の御子イエス・キリスト」⁽⁵⁰⁾であったのである。

一般に哲学や自然宗教といわれるものは、現象からの演繹とか、一般法則や形而上学的推論等によって神の存在を(天地の主、万物の創造主としても)認めるが、それは人間の側からの謂ば下からの働きによるものである。しかし、カイオーニ、アジェリアス、シシリアスらがともに信じ受け入れていたのは、聖パウロが宣言していた「死んで復活した神の御子イエス・キリスト」、即ち「受肉した神、イエス・キリスト」により、上から与えられた啓示宗教⁽⁵¹⁾である。「受肉した神の御子イエスの生と死と復活」という単純ではっきりした歴史的事実によって啓示と人間が会おうのであるが、⁽⁵²⁾それは人間の理性および推論を遙かに超えたもので、人間にとっては測りえないほどの奥義(mysterium)である。従って、我々の側においては信仰が要求されるのである。それはただ信じて受け入れるということではなく、信じ、信頼し、愛し、従うという「意志」を伴った「全人格」にかかわる態度が要求されるものである。

啓示宗教においては、天地の創造から救済の歴史に至るまで一貫して「ベルソナ」(persona)に関わる問題が貫いていることをニューマンは指摘する。⁽⁵³⁾先ず旧約聖書に表われた人祖アダムは自由で責任をもつ人格として描かれており、所謂「原罪」(Original Sin)といわれているものは、この自由で責任ある人格の不従順に帰せられている。そして天使は言うまでもなく、悪の原理としての悪魔の姿もまたベルソナとして描かれている。⁽⁵⁴⁾神御自身は旧約時代には、ご自分を様々な形で表わしてこられたが、その終りの日には「御子」(the Son)を遣わすことによって御自身を完全に表わされたのであるが、そ

れがイエス・キリストにおいて実現された「御子の受肉」と呼ばれるものである。「ヘブライ人への手紙」には次のようにある。

神は、かつて預言者たちによって、多くの形で、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終りの時代には、御子によって私たちに語られました。神は、この御子を万物の相続者と定め、また、御子によって世界を創造されました。

御子は、神の栄光の反映であり、神の本質の完全な現われであって、万物をご自分の力ある言葉によって支えておられますが、人々の罪を清められた後、天の高いところにおられる大いなる方の右の坐にお着きになりました。(1:1-3)

この「人となられた神の御子」の言葉、行い、生涯と死と復活は、神がどのような方であるかを余すところなく示すものであった。新約聖書はその受肉した御子を通して神の姿を完全に示しているのである。⁽⁵⁵⁾信仰によって人となられた神の御子を受け入れた人々は、神の子⁽⁵⁶⁾生ける神の神殿⁽⁵⁷⁾、キリストの兄弟⁽⁵⁸⁾、友⁽⁵⁹⁾と呼ばれ、その人々の心のなかには「父」(God the Father)と「子」(God the Son)と「聖霊」(the Holy Spirit)が宿って⁽⁶⁰⁾、その人々を限りなく御子御自身の姿に近づけて下さるのである。⁽⁶¹⁾また、この父と子と聖霊はそれぞれにペルソナであって、三つのペルソナを持つ唯一の神、つまり「三位一体の神」なのである。⁽⁶²⁾そして、既に使徒達の時代から、キリストを信じる人々は、牧者である司教のもとに集い、唯一なる聖霊がそのなかに宿る新しい霊的な一人の人として「キリストの体」としての「教会」(Ecclesia)と呼ばれており、⁽⁶³⁾この信徒の集団も、ペルソナとしての聖霊の宿る形而上のペルソナを付与されているのである。⁽⁶⁴⁾

ニューマンは科学も自然も互いに和解するためには、対象を要求しているが、両者が本当に和解できるためには「神の受肉」がどうしても必要であったと述べている。そして科学や哲学や自然宗教といわれるものの一切が、あたかも「散っていた光線が一所に集められるように」イエスの人性 (human nature)において一つに集められるのだと表現している。⁽⁶⁵⁾先の聖パウロの言葉に示されているように、「新約」において神は「ペルソナ」(persona)をもった方であることがはっきり現れた。神は単に愛、憐れみ、聖であるというように抽象的な存在なのではなく、神の本性は、イエスの「自己否定」においてはっきりと目に見えるように「パーソナル」な性格をもった方として現われたのである。⁽⁶⁶⁾ニューマンはヨハネの福音書を引用してこれを説明する。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」(3:16)のであり、我々はその独り子において神がどういう方であるかを「見る」(14:9-10)ことができ、また「知ること」(14:7)ができるのである。「いまだかつて、神を見たものはいない」が、「父のふところにいる独り子である神、この方が神を示され」(1:18)たのである。その方は「言葉」(the Word) (1:1-3)であり、「光り」(the Light) (1:5, 9; 8:12)であり、「生命」(the Life) (6:35, 48-51; 11:25; 14:6)であり、「真理」(the Truth) (14:6)であり、「神の栄光」(the Divine Glory) (1:14)なのである。その「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」ので、「その栄光を見た」(1:14)者たちは「見たこと」を「証し、伝える」(ヨハネの手紙1:1-4)のだ。カイオーニ、アジェリアス、シシリアスがその証言を聞き、それを信じて受け入れ、愛し、そしてカリスタに伝えたのは、まさにこの「受肉」した神イエス・キリストであったのである。

What the three told her in common and in concord was at once the measure of her creed and the ground of her acceptance of it. It was that wonderful unity of sentiment and belief in persons so dissimilar from each other, so distinct in their circumstances, so independent in their testimony, which recommended to her the doctrine which they were so unanimous in teaching. (p. 293)

受肉の主な目的は、神と人間との和睦であって、⁽⁶⁷⁾御子の苦しみと死によって人間のために永遠の生

命を勝ち得ることであり、この目的はイエスが「成し遂げられた」⁽⁶⁸⁾と言ってその魂を父に返したときに達成された。そしてイエスの死からの復活は更に我々の将来の祝福の前準備であり、我々の復活という恵みをもたらしたのであった。⁽⁶⁹⁾

カリスタが自分を本当に愛してくださった方に信頼と愛をもって応えていこうとしたときに、彼女と神との間にはおのずと親しい交わりが生れ、その「人格的な愛の交わり」が彼女の人格を大きく成長させた。その方自身が彼女のなかに住まれ、彼女をご自分の姿に変えられたからである。⁽⁷⁰⁾そしてカリスタは自分のために死んで復活された方への信仰と愛の最高の証として、その方と同じ残酷な死を引き受けた。それはその方に対する愛の最高の表現であったばかりでなく、彼女は死を通してその方と同じ様に永遠の生命に生きるという信仰と希望に支えられていたのである。

5. 人格的影響

異教の少女カリスタがキリストとの出会いへ導かれていく過程は、既に神、キリストとの人格的出会いを果たしていた人々、カイオーニ、アジェリアス、そしてシシリアスとの出会いを通してであった。⁽⁷¹⁾彼ら一人一人の中には単純ではあるが真実な決断があり、その結果ある静けさと聖さが彼らを支配していたが、それがカリスタを圧倒していったのであった。⁽⁷²⁾それは確かにカリスタの人格に対する彼らの影響であったが、一般に言うところの一つの人格の他の人格に対する影響といったもの以上の深い影響であったのである。ここでもう一度、かのキリスト者たちの「頬を染めた」という記述に注目してみたい。先ずカリスタの幼年期に大きな影響を与えたカイオーニは、何かに満たされている人のようであり、その満たされた幸せが他の人々に対する思いやりとなって溢れ出てくる善意の人以外の何者でもなかった。彼女はカリスタがかつて出合ったどのような人とも違った強烈な印象を残しているが、特にキリストのことを語る時にいつも頬を赤らめたことがカリスタの心に忘れ得ぬ思い出として残っていた。アジェリアスは、カリスタに人間の心を完全に満たすことのお出来になる人格的な神の愛について語るが、その時彼もまた頬を染めながら語るものであった。⁽⁷³⁾司教シシリアスは、永遠不変で尽きることのない三位一体の神が我々一人一人を愛し、御子は我々一人一人のために死なれたことをカリスタに説いたが、⁽⁷⁴⁾そうした言葉以上に、彼自身の中に何か畏れ多い存在を感じさせ、礼拝したいような気持ちを起こさせずにはおかないような何かを持っていた。カリスタはシシリアスの中に、優しさと穏やかさが力強さと共存しているのを感じ取った。それは彼女がこれまで経験したものとは全く違った新しい何かで、人間を超越するある真実で聖なる存在であった。⁽⁷⁵⁾シシリアスは愛そのものである方に近づけば近づくほどその方御自身が我々の中へ入ってこられ、我々の中に住まれて、我々をその方御自身のお姿に変化させてしまい、我々は永遠にその愛の交わりの裡に住まうことを語った。⁽⁷⁶⁾彼自身、信仰によってその愛である方を信じ、祈りによってその方と親く交わっていたが、彼を特に生かしていたのは愛の秘跡であるキリストの体「聖体」であった。⁽⁷⁷⁾命を与えるほどに愛されたその方を受けることによってその方と同じように命を与えるほどに愛する力は聖体からいただくものである。カイオーニ、アジェリアス、そしてシシリアスの中におられたのは他ならぬキリストであり、彼らを生かし、彼らを愛において一つに結んでいたのはキリストであった。そして彼らを通してカリスタが導かれていったのも、キリストにおいて結ばれている愛のまどいであった。⁽⁷⁸⁾こうしたキリストにおける親密な愛の交わりをニューマンは「頬を染める」という言葉で表現したのである。

人間は皆理性と良心を与えられているので、どんな人でも神の方へ導かれ、ある程度まで超自然で神的な対象を見出すことが可能である。⁽⁷⁹⁾また神の恩寵は地上普く行き互っていてどんな人にも与えられているから誰れでも優れた徳を行うことが出来る。⁽⁸⁰⁾しかし信仰によって、また特に洗礼によって人間の魂に注がれる恩寵は人間の思いや動機を清め、魂を神の方へ挙げさせ、体をも聖化し、人間の本性を矯正し高めてくれる神の恵みで、この恵みは人間の心の中に宿って密やかに働くのである。⁽⁸¹⁾その働きは三位一体なる神、特に聖霊に帰せられるのである。⁽⁸²⁾真実な信仰を持った単純素朴なカイオーニを通して働かれたのは聖霊であり、聖霊は彼女が見つめていた方の姿に彼女自身を変えたのであった。かつ

て誇り高く厳格でありながら野心家で快樂を好んだシシリアスを、柔和・謙遜で愛深い者に変えたその同じ方は、「土の器」(Cor II 4:7)なるこの乙女をもキリストの似姿に変えたのであった。カリスタを愛し、彼女の為に命を捧げ、彼女を生かして下さったその方は彼女をもまた他の人々に対して開かせて下さった。キリストと出会い、キリストを受け入れ、その愛に応えることによってカリスタ自身が愛の交わりである三位一体の内的生命に与ったことによって、彼女を通してその豊かな生命は他の人へも溢れ出ていき、影響を与え始めた。彼女自身の態度の変化は看守の妻に対する彼女の思い遣りに見たが、彼女の与えたとりわけ顕著な影響は隠れた霊的な影響で、それは彼女の死後起こったジューバの回心⁽⁸³⁾とアジェリアスの殉教⁽⁸⁴⁾であった。

人と人との出会いは摂理的に与えられるものである。また他の人格との出会いによって我らの受ける影響も我らの思いを超えるものである。しかしそれにもまして人の魂の深みで行われる影響は非常に静かな影響であり、更に時空を超えるもので、人の言葉で表わすには余りに靈妙で説明することは不可能とさえ思われる。神、キリストにおける人格的なかわりはキリストにおける友愛とも呼ぶべきもので、このような友愛はすべての人を結びつける真実で永続する友愛である。⁽⁸⁵⁾それはまた地上の目に見える人々だけでなく、地上では直接に出会ったこともない人々をも結びつけるものである。⁽⁸⁶⁾

ニューマンの教育思想の中心には「人格的影響」があることは既に述べたとうりであり、彼のモットーとした「心が心に語りかける」(Cor ad Cor Loquitur)はまさに人格と人格の響きあいである。しかし『カリスタ』における「人格的影響」は、それ以上に上述したような三位一体の内的生命にかかわる問題を含んでいる。教養豊かなシシリアスは信仰を説明することができたが、単純素朴で真実な信仰の持ち主であったカイオーニには雄弁さはなかったが、無意識のうちに人を惹きつけるものがあつた。⁽⁸⁷⁾ニューマンはそのような影響を「神の静かなる働き」(God's noiseless work)と呼んでいる。⁽⁸⁸⁾教会は何世紀にも互って、時には激しい迫害の嵐に遭いながらも福音を伝え人々を生かしつづけてきた。それは組織の力や権力によるものでもなければ、まして議論や書物などによるのではなく、直接にまた間接に人格的な影響によるのであり、しかもその影響は本人が意識するとしないとにかかわりなく、否、むしろ本人さえ知らないうちに、その人の中に働く神の静かなる働きによるのだ。そして神の静かなる働きを遂行するには、ごく少数の人々で足りるのである。⁽⁸⁹⁾

6. 愛と赦し

カリスタはあの三人のキリスト者と出会い、彼らの影響を受けながら、福音書のなかで罪の女マリアとイエスとの出会いの場面へと導かれ、そこで最終的にイエスとの出会いが決定的なものとなった。筆者は、カリスタの魂の絶えざる上昇志向と上からの恩寵の絶えざる働きかけと招き、そして他の人格の影響、これらすべては、「イエスと罪の女マリア」とこの出会いの場面へと収斂されていき、そこでカリスタとイエスとの出会いが実現されたとし、その場面を『カリスタ』におけるニューマンのパーソナリズムが集約される点として捕らえた。カリスタが福音書を開いて読み始め、読み進むうちに彼女自身がイエスとの出会いへ導かれていく本書の中心的な部分を、些か長いがもう一度引用して考察を進めたい。

It opened a view of a new state and community of beings, which only seemed too beautiful to be possible. But not into a new state of things alone, but into the presence of One who was simply distinct and removed from anything that she had, in her most imaginative moments, ever depicted to her mind as ideal perfection. Here was that to which her intellect tended, though that intellect could not frame it. It could approve and acknowledge, when set before it, what it could not originate. Here was He who spoke to her in her conscience; whose Voice she heard, whose Person she was seeking for. Here was He who kindled a warmth on the cheek of both Chione and Agellius. That image sank deep into her; she felt it to be a reality. She said to herself, "This is no poet's dream; it is the delineation of a real individual. There is too much truth and nature, and

life and exactness about it, to be anything else. Yet she shrank from it ; it made her feel her own difference from it, and a feeling of humiliation came upon her mind, such as she never had had before. She began to despise herself more thoroughly day by day ; yet she recollected various passages in the history which reassured her amid her self-abasement, *especially that of His tenderness and love for the poor girl at the feast, who would anoint His feet ; and the full tears stood in her eyes, and she fancied she was that sinful child, and that He did not repel her.* (p. 326
イタリック体は筆者)

これに“O what a new world of thought she had entered ! it occupied her mind from its very novelty. Everything looked dull and dim by the side of it ; . . .”と続き、カリスタが超自然の世界の理解へと進んで行くことを示す。

She saw that there was a higher beauty than that which the order and harmony of the natural world revealed, and a deeper peace and calm than that which the exercise, whether of the intellect or of the purest human affection, can supply. (p. 327)

そして彼女は更に、キリスト者たちを生かしている内的な生命の理解を深めていく。

She now began to understand that strange, unearthly composure, which had struck her in Chione, Agellius, and Caecilius ; she understood that they were detached from the world, not because they had not the possession, nor the natural love of its gifts, but because they possessed a higher blessing already, which they loved above everything else.

しかし、こうした理解を遙かに超えて、彼女の思いは「そのお方」に対するものであった。

But *the ruling sovereign thought of the whole was He*, who exemplified all this wonderful philosophy in Himself. (p. 328 イタリック体は筆者)

Callista was now living, not in the thought of herself, but of Another. (p. 345)

牢獄を訪れたシシリアスに対して、カリスタが開ロ一番に言った言葉は“I want to be a Christian, if I may ; He came to save the lost sheep I have learnt such things from this book —let me give it while I can. I am not long for this world. Give me Him who spoke so kindly to that woman. Take from me my load of sin, and then I will gladly go.”であった。この言葉のなかには二つの問題が含まれている。第一には、受肉した神は「失われた子羊たち」、つまり、罪人である人間（そのなかには当然カリスタも含まれているが）を救うために人としてこの世に来られたことをカリスタは理解し、信じたということである。第二には、彼女の知性と良心がその対象を渇き求めていた以上に、彼女の人格のもっと深いところには、彼女の人間性の全てを包み込むような「愛」と「赦し」への渴望があったことである。あの罪の女に優しく語り掛けたその方が、自分をも罪の重荷から解き放ってくださることを、そして自分もその方の愛に全身全霊をもって応えていくことを、それをカリスタは渴望していたのである。ここには罪人としてのカリスタと、愛と赦しの神とのペルソナ的出会いが用意されているのである。再びカリスタの言葉を聞こう。

“I believe Him most absolutely. Keep me not from Him ; give Him to me, if I may ask it ; give

me my Love. ” (p. 346)

“I will be a Christian : give me my place among them. Give me my place at the feet of Jesus, Son of Mary, my God. I wish to love Him. I think I can love Him. Make me His.” . . . “I am very ignorant— very sinful,” . . . “but one thing I know, that there is but One to love in the whole world, and I wish to love Him. I surrender myself to Him, if He will take me ; and He shall teach me about Himself. ” (pp. 346—347)

この「罪の女とイエス」の出会いの場面が本書の中心であるとするならば、『カリスタ』におけるニューマンのパーソナリズムの中心も、この場面が示す「愛と赦し」にあるのではなかろうか。以下にルカ福音書のこの場面を引用しよう。

さて、あるファリサイ派の人が、一緒に食事をしてほしいと願ったので、イエスはその家に入って食事の席に着かれた。この町に一人の罪深い女がいた。イエスがファリサイ派の人の家に入って食事の席に着いておられるのを知り、香油の入った石膏の壺を持って来て、後ろからイエスの足もとに近寄り、泣きながらその足を涙でぬらし始め、自分の髪の毛でぬぐい、イエスの足に接吻して香油を塗った。イエスを招待したファリサイ派の人はこれを見て、「この人がもし預言者なら、自分に触れている女がだれで、どんな人か分かるはずだ。罪深い女なのに」と思った。

そこで、イエスがその人に向かって、「シモン、あなたに言いたいことがある」と言われると、シモンは、「先生、おっしゃってください」と言った。イエスはお話しになった。「ある金貸しから、二人の人が金を借りていた。一人は五百デナリオン、もう一人は五十デナリオンである。二人は返す金がなかったので、金貸しは両方の借金を帳消しにしてやった。二人のうち、どちらが多くその金貸しを愛するだろうか。」シモンは、「帳消しにしてもらった額の多いほうだと思います」と答えた。イエスは、「そのとおりだ」と言われた。そして、女の方を振り向いて、シモンに言われた。「この人を見ないか。わたしがあなたの家に入ったとき、あなたは足を洗う水もくれなかったが、この人は涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でぬぐってくれた。あなたはわたしに接吻の挨拶もしなかったが、この人はわたしが入って来てから、わたしの足に接吻してやまなかった。あなたは頭にオリーブ油を塗ってくれなかったが、この人は足に香油を塗ってくれた。だから、言うておく。この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさと分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない。

そして、イエスは女に、「あなたの罪は赦された」と言われた。同席の人たちは、「罪まで赦すこの人は、いったい何者だろう」と考え始めた。イエスは女に、「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい」と言われた。(Luke 7 : 36—50)

ベルソナである神は、愛と赦しの神でもある。罪とその重荷にあえぐ人間は自由と責任のある人格的な存在である。人間の愛への限りない憧れも、罪の赦しへの限りない渴望も、⁽⁹⁰⁾我々が父母や友人その他あらゆる人々にたいして抱くのと等しく、人格的な対象を必要としている。カリスタの出会った神は「あなたを愛している」と語り掛け、「あなたの罪は赦された」という言葉をもって癒しと救いをもたらした。カリスタの出会ったのは、彼女の人間性全体を包み込んで癒しと救いを与え、彼女の人格に対応して「愛し」「赦す」ベルソナである神だったのである。あの罪の女と同様、カリスタはイエスの愛によって清められた。カリスタの回心と赦しは表裏一体の事実であった。なぜなら「赦されることの少ないものは、愛することも少ない」(Luke 7 : 47) のだから。

ギリシャ的な倫理によって、運命的な諦めをもって生きていたカリスタの心は何処にも安らぎを見出せず、対等の人格によっては彼女の背負っていた罪の重荷から解放されることができなかった。しかし、こうした不安と重荷から彼女を解放したのは善の追求によって得られる安心でも自己反省的な心理や自

嘲の念でもなく、また自分の外にある法則的なものに対する運命的な嘆息でもなかった。彼女はあの罪の女に対するイエスの姿と出会ったとき、その方に自分の全存在を賭けていこうと決断したのであった。カリスタにとって神の慈悲を知ることが信仰の理解と不可分のものであったのである。

Religion could not be without hope. To worship a being who did not speak to us, recognize us, love us, was not religion. It might be a duty, it might be a merit; but her instinctive notion of religion was the soul's response to a God who had taken notice of the soul. It was loving intercourse, or it was a name. (p. 293)

イエス・キリストを信じる「信仰」によって神の前に立ったカリスタは、神に対する平和を得、なお将来の光り輝く存在への進展を希望をもって喜びかつ感謝していたのである。だからカリスタは死をさえも喜んで引き受け、その喜びのなかに自分を忘れたのであった。⁽⁹¹⁾

"I wish *Him* to kill me, not myself," she said. "I am His victim. My brother! I have no brother, except One, who is calling me." (p. 358)

V 終章

1. 『カリスタ』におけるアガペーと恩寵

カリスタの心の中に成長してきた愛は、対する者の絶対なる独立性の認識から始まった人格的な愛であった。そして、まさにこのような愛が彼女に真の個の発見をもたらしたと言ってよい。⁽⁹²⁾この愛はまたカリスタをその主観性から解放したが、同時に彼女に決断を要求し、冒険を可能にさえして、自分以外のものに向かう人格の最も強烈なる行為、つまり死の受諾にまで向かわせるという徹底した自己放棄の愛でもあった。⁽⁹³⁾

愛は種々異なる様相を帯びて現れるが、その諸相は複雑に絡み合っていて、その各相を定義づけることは極めて困難である。愛と言う言葉はまた人間の間だけではなく、神と人間との関係を表すためにも用いられる。愛は聖書の出来事のコアであり、聖書全体を通して神が人間と関わる場合の関わりを中心にある。聖書における愛はプラトンやプロティノスなどに顕著に見られるような人間の霊が神的なものに向かって努力するといった宗教的エロースの神秘的追求ではなく、むしろ神の先行する愛に依存するもので、人間の側からは神の先行する愛に対する感謝に満ちた応答である。⁽⁹⁴⁾

神は愛である。神は愛からすべてを創造された。神はご自分が創造された人々をあるがままに愛される。神の愛はそれが罪人たちにまで、いや罪人にこそ最も注がれるという事実明らかに示されている。神から愛される時、愛される人々がどれほどの神の愛に値するかということは全く問題にならない。愛することが神の本性だからである。⁽⁹⁵⁾神に創られたものはすべて神の愛の対象であって、その愛された事実によって価値を得るということであるから人間の功績に関わりがない。この自らの固有の性質による神の愛はイエス・キリストにおいて示された。これがアガペーである。⁽⁹⁶⁾

イエスは「失われたものを捜して救うために」(Luke 19: 10) 来られた。彼が「あなたの罪は赦された」と言う時、神のアガペーは創造的な力として実際に人間の罪を赦し、人間の為に神との交わりの道を開いたのである。そしてイエスが十字架上でその生命を捧げた時、アガペーの愛は極みまでも自分を与え自ら注ぎ出す愛であることが示された。(Amor Crucifixus est. p. 436) 神に行くのは我々ではなく、神の愛が我々に来たもう。アガペーは神ご自身の人間に至る道であり愛である。イエスは義人のためではなく、弱くて不敬虔で罪人で、敵でさえあった人間のために死なれた。神のこのアガペーに対する信仰によって人間の心が神に向かって開かれるとき、神のアガペーは聖霊を通して人間の心に注がれ、聖霊はその人の中で実を結ぶのである。⁽⁹⁷⁾

キリスト教がギリシャ文化と出会ったとき、神から人間に下って来る無償の愛、その愛を受け入れた人の心の中に生じる神に向かう愛、そしてその愛における人間相互の兄弟愛はギリシャ語のアガペー (Agape) という一語によって確立した。しかしこうした愛が明らかにその主題である『カリスタ』にはアガペーという言葉は一度も出てこない。本書で度々使われているのはラテン語の gratia に相当する grace である。恩寵または恩恵と訳されるこの言葉は神の人間に対する態度または働きかけを指すが、その意味内容については種々の理解があるがその最も狭い意味においてはイエス・キリストの十字架と復活において示された神の和解の働きであり、それは罪人を義人とし、受け入れがたいものを受け入れる愛にはかならない。イエスにおいて現され、信仰によって与かる神の恩寵は罪の赦しの恩寵であり和解の恩寵であるだけでなく新生の恩寵でもある。⁽⁹⁸⁾ 恩寵はカリスタの心に先行して働き彼女の心を清め高めていったが、彼女が真実で強固な目的観念を持って徹底して自己を放棄し得たのは、このような小さく無力な相手に神のアガペーと恩寵が結びついて全く新しい命に復活させたからである。

この終章においてあえてアガペーを取り上げたのは、本邦におけるニューマンの最初のオールラウンドな紹介者である石田憲次が、その最晩年に筆者に対して「異教徒であるカリスタがキリスト者に求めていたのは、相手の価値によって左右されない無償の愛アガペーであったことに今なお深い感動を覚える」と語られたことが忘れ難い思い出として残っているからである。⁽⁹⁹⁾ また、近代文芸精神史と文芸批評の立場からニューマンの重大さを高く評価している荒川龍彦が、カリスタとアジェリアスの関係をジイドの『狭き門』におけるアリサとジェロームの関係に比していることも筆者の念頭には常にあったし、時に『カリスタ』の主題が人間的な愛情を否定することによって神的な愛を受けるのだという解釈にも出合うことがあるからである。⁽¹⁰⁰⁾ しかし、既に見てきたように、アジェリアスがカリスタに求愛した時、彼は一時的に地上的な慰めを求めはしたが、彼女に対する彼の愛は神への愛に全く繋がらないものではなかったし、彼自身究極的にはカリスタと同じところへ高められていった。本文のどこにも神の愛が人間的な愛情を充足させるという記述はなく、この二つの愛が対立するものであるというようなことをにおわせる箇所も見いだせない。却って本書に一貫しているのは、超地上的な愛に対するカリスタの激しい渴望にもまして、神の愛は先行的に働き、絶えず人間の心に語りかけ、神の愛は人々を通して絶えず働きかけているということであった。本書に際立っていたのは信仰によって人間の内部に生じた全く新しい「いのちとしての愛」であり、それは人間的な愛を否定するのではなくそれを高めるものであった。

もし、『カリスタ』にエロースを認めようとするならば、それは善きものに向かうプラトンの愛ないしは知を求める愛と言えるだろうか。その立場から本書には「ギリシャ的知」と「キリスト教的愛」の問題が見られると言うことはできよう。キリスト者アジェリアスが自分の宗教に対する無数の疑問を抱えて悶々としていた時、カリスタとその兄アリストのギリシャ的教養と出会っていかにも彼らに魅され、いかに生き生きとしたかを我々は見た。ところがギリシャの教養を豊かに所有していたカリスタは、ギリシャ的知によってはその魂の渇きは癒されることは出来ず、却って心の空しさを覚えていた。この異教の文化の中に育った少女が、その知・情・意と人間性の全てをかけて魂の根源的な渇きをどこまでも追求している姿が物語を貫いていたが、それと同時に神のはほえみという恩寵の光りにもたとえられる温かな光線が物語にはたえず注がれていた。あの冒頭の緑豊かな風景を育てていた隠れた泉のように、恩寵は物語の中で人の心に密やかにそして確実に働き、人の心を清め、暖め、高め、人を神の似姿にまで変化させ、互いを愛において結びつけつつ物語を進行させていった。人の目から隠されていた恩寵は、物語の最後になって突然シシリアスの口から奔流のようにほとばしり出、カリスタの葬儀の時には「恩寵の栄光の賛美」の大合唱となって最高潮に達するのである。

Benedicamus Patrem et Filium cum Sancto Spiritu. Benedictus, et Laudabilis, et gloriosus, et superexaltatus in saecula. . . . And yet what was she but only one instance out of ten thousand of the Almighty and All-manifold Grace of the Redeemer? And who was there of all of them, there

assembled, from the authoritative preacher down to the humblest beginner, from the authoritative preacher down to the slave or peasant, but was equally, though in his own way, a miracle of mercy, and a vessel, once of wrath, if now of glory? (pp. 377—378)

『カリスタ』は愛の賛歌であり恩寵の賛美そのものである。

2. おわりに

ニューマンはその自伝的著『アポロギア』(*Apologia pro Vita Sua*, 1864)のなかで、十五歳の時の宗教的回心において、神と我という二つの存在の深い体験のあったことを記している。これは、「神と我というこのただ二つの絶対的で自明の存在」(“two and two only absolute and luminously self-evident beings, myself and my Creator.”)という非常に深い実存体験であって、その後の生涯を通して決して揺らぐことのない確信を彼の魂の根底に刻みつけた。ニューマン自身「最初の内的回心」と呼んでいるこの体験は、その49年後においても「手足を有するより確かなものとして意識している」ほど深い刻印を魂に押したのであり、それは「神の慈悲によって二度と再び消されまたは曇らされることがなかった」のである。またそのときに、「明確な信条の力に打たれ、理知の中に教理の刻印を受ける」という思想上の大きな変化も経験し、すでに目覚めて活発に働き始めていた彼の理性の中に信仰の芽生えを見たのである。⁽¹⁰¹⁾(ここで言う信仰は人間に要求される掟への服従という問題をも含んでいるが、特に神およびイエス・キリストという人格的存在を認め、人格的な関わりを持つことを意味している。)そしてあの内的体験は、生涯に亘って理性的認識とキリスト教の真理の問題に関わったニューマンにとって、理性と信仰の問題についての最初の意識化であると同時に、神およびキリスト、そして人間との暖かい相互関係たるパーソナリズムの原体験であったと言えよう。この時以来ニューマンはその長い生涯を一意専心神と人々を愛することの意味を追求したのであったから、あの体験はまた彼のパーソナリズムの生成発展に決定的な内的基礎を与えたと考えてもよからう。

ニューマンにおいて「神と我」の関係は神と共にあるとか、神と向き合いあるいは神と対決するというような閉じられたものではなく、自分のまわりの人々や出来事に対する絶えざる興味と観察、深い洞察と理解という常に他に向かって人格的に開かれた個の追究という彼の生涯に亘った課題の基礎をなしている。ニューマンにとって宗教は血の通った温かなベルソナ対ベルソナの友愛という相互関係であったし、彼が人生の最大の目標としたのは愛である。そしてその愛の根底には、愛の交わりそのものに他ならない三位一体の神、つまりベルソナとしての愛の交わりなる神がおられたのである。⁽¹⁰²⁾

カリスタがあの人々のキリスト教徒と出会う度に、それぞれの人格の深みに潜む恩寵が彼女の人格と呼応するかのような波動が生じて物語の筋はおのずと運ばれていった。そして遂にあの場面に至って「神と我」の人格的な出会い、いうなれば信仰と愛と赦しのドラマは頂点に達したのである。筆者はそこに至って「ニューマンのパーソナリズム」としか言いようのないようなニューマンの宗教心の核心に触れた思いがしたのであった。

魂の生命は分かち得ない現実であり、もし魂の働きを抽象化してしまうならば人間自体もばらばらなものになってしまうということをニューマンは確信していた。⁽¹⁰³⁾そして人間が真理と神の方へ向かっていくのは抽象的で概念的な魂の働きによるのではなく、人格全体によることもニューマンは深く感じていた。⁽¹⁰⁴⁾宗教及び真理の問題に関するニューマンのアプローチは一貫して人格的かつ具体的であったが、それらが波及していくのも人格の影響以外にはあり得ないと彼は確信していたのである。⁽¹⁰⁵⁾ニューマンにあっては、真理と宗教の中核にあるのは常にベルソナを持った位格的存在なのである。幼い時に神との出会いを体験して以来、己が魂のうちに神との生きた接触を保ち続けていたニューマンにとって、神の存在についての承認は概念的承認とはおよそ異なったものであった。我々はカリスタという一人の人物において、愛と真理に向かって成長していくダイナミックな統一体としての人間が十二分に描かれていたのを見てきた。ワルグラヴ(J. H. Walgrave)の言葉を借りれば、『カリスタ』はまさにニュー

マンのエートスから生まれた作品⁽¹⁰⁶⁾であって、ニューマン自身の「神と我」の体験がその魂の深みから溢れ出て巧まずしてこの作品に結実したと言ってよいであろう。(1993年11月10日受理)

註

1. *The Apologia Pro Vita Sua*, ed., Martin J. Svaglic, Oxford University Press, 1967, p. 18.
2. *University Sermon* II, p. 17.
3. 阿部次郎『人格主義』(角川書店 1954) p. 54; 河合隼雄「オルポートによる人格の成熟」『精神の科学2』佐治守夫他編(岩波書店 1983年) p. 278; G. W. Allport op. cit., pp. 60—68等参照。
『カリスタ』で用いられている person という言葉には日本語で人間の特性を統一的に表す「人格」という言葉を当てた。拙稿(1)註13参照。
4. *Callista*, p. 219. See also: *Grammar*, p. 257; 拙稿(2) p. 22.
5. “I should begin thus. I am conscious of my own existence.” (*Proof of Theism*, p. 1) “Our consciousness of self is prior to all questions of trust or assent.” (*Grammar*, p. 46) “. . . Thus self-knowledge is at the root of all real religious knowledge, . . .” (*Parochial and Plain Sermons* I, p. 42) “Newman’s radical point of departure is the consciousness of his own existence.” (Klocker, Harry R. ‘The Personal God of John Henry Newman’ *The Personalist*, vol. LVII University of Southan California, (1976), 150. See also: *Parochial and Plain Sermons* I, p. 19; *Parochial and Plain Sermons* IV, p. 82.
6. *Proof of Theism* pp. 1—4.
7. “He cannot change his nature and his habits by wishing, but is simply himself, and will ever be himself and what he now is, wherever he is, as long as he continues to be, . . .” (*Grammar*, p. 257) “I am what I am, or I am nothing. . . I cannot avoid being sufficient for myself, for I cannot make myself anything else, and to change me is to destroy me.” (*Grammar*, p. 224) “My first elementary lesson of duty is that of resignation to the laws of my nature, whatever they are; my first disobedience is to be impatient at what I am, and to indulge an ambitious aspiration after what I cannot be, to cherish a distrust of my powers and to desire to change laws which are indetical with myself.” (*Grammar*, p. 224) Compare to *Parochial and Plain Sermons* IV, pp. 18—36.
8. “Thus he gradually advances to the fulness of his original destiny.” (*Grammar*, p. 225) *Callista* には The promise of the beginning とある。
9. *Grammar*, p. 225. *University Sermon* II, p. 18. See also: A. Boekraad and H. Tristram, *The Argument from Conscience to the Existence of God according to J. H. Newman*, (Louvain, 1961) p. 55
10. *University Sermon* II, p. 18.
11. Ibid.
12. 聖書の譬え (Mt. 13: 18—23, Marc. 4: 13—20, Luke 8: 11—15) のように、初めは喜んで耳を傾けても、人々の心の中で次第に枯れてしまうこともある。
13. *Grammar*, p. 73; *Difficulties in Anglicans* II, p. 247; *Historical Sketches* III, p. 79.
14. 「良心」という日本語は、一般には善を命じ、悪を斥ける個人の道徳と考えられており、客観的・現実的に個人の生きた体験に生起する良心というものの概念は人間の全人格にかかわる心的現象ないし個人的事実から得られるもので、個人に本来的の自己を取り戻させると同時に社会的には義を取り戻させるものであるとされている。英語の *conscience* の語源はラテン語の *con* (共に) *scire* (知る) で、全体知・共同知であり、自己意識ないし自覚を表す。従って、語源的に把握された良心は道徳意識とほぼ同義であるといえよう。([哲学事典] 平凡社 1989 参照)
15. “For what is a higher guide for us is speculation and in practice than that conscience of right and wrong, of truths and falsehood, those sentiments of what is decorous, consistent and noble, which our Creator has made a part of our original nature.” (*Apologia*, p. 102) “. . . conscience; indeed is implanted in the breast by nature.” (*The Idea of a University*, p. 181.) “By conscience I mean the discrimination of acts as worthy of praise or blame. Now such praise or blame is a phenomena through which, . . . , my existence is brought home to me.” (*Proof of Theism*, p. 8) See also: *University Sermon* V, p. 81; *Difficulties in Anglicans* II, p. 337.

16. 良心は人間存在と不可分で、良心の声を聞くということは直接に神の声を聞くことであるが、それは受肉された神によって啓示された三位一体の神の意志につながるものである。(See: *Proof of Theism*, p. 8; *The Idea of a University*, p. 181; *Parochial and Plain Sermons* II, p. 18; *Difficulties in Anglicans* II, pp. 248—249; See also: Bremond, op. cit., *Mystery of Newman*, p. 334.
17. *Grammar*, p. 74. See: Boekraad, A. J., *Personal Conquest of Truth according to Newman* (Louvain, 1955), p. 259.
18. “I hold . . . there is a God, because there is a moral obligation.” (*Proof of Theism*, p. 1) *Grammar* の中では次のように言っている: “Conscience, too, teaches us, not only that God is, but what He is; . . .” (p. 251) “Conscience suggests to us many things about that Master, whom by means of it we perceive, but its most prominent teaching, and its cardinal and distinguishing truth, is that he is our Judge. . . a God of Judgment and Justice.” (p. 252) See also: *Meditations and Devotions*, p. 496.
19. *Grammar*, p. 73—74. Walgrave, J. H., *Newman the Theologian* (Seed and Ward, New York, 1960), pp. 73—74.
20. Ibid.
21. Ibid., p. 251.
22. Ibid.
23. *Callista*, pp. 314—315. See also: 拙稿 (3) pp. 2—3.
24. See: *Difficulties in Anglicans* II, pp. 247—248. See also *Meditations and Devotions*, pp. 521—522.
25. Ibid., pp. 248—249. See also: p. 496.
26. ニューマンの未公開のマニスクリプトである。(全文が *The Argument of God's Existence according to Newman*, op. cit.に収録) 編者によれば、ここにはニューマンの思想全体における中心的なものが書き留められている。(Preface p. 5)
27. *Proof of Theism* pp. 13—14.
28. Ibid., p. 14.
29. *University Sermon* II, p. 18. See also: Honoré, Jean, “Authority in the Church and Freedom of Conscience” (Academic Symposium, Rome, 1990) 12.
30. 「恐れ」(fear)は我々とは別のある存在を意識させるが、「恥」(shame)は我々を単に人間の思考範囲に留まらせるもので良心はの場合いわゆる道徳感覚(moral sense)になってしまい、義務の命令もある種の好みのようなものになってしまうとニューマンは言う。(See: *The Idea of a University*, p. 191) 人間の良心には多面的性があるが、「恐れ」の感覚ではなく「恥」の面だけを見、その感覚のみを取り上げるとするならば、人間の最も深いところにある感情を窒息させ、人間本性を否定してしまうことになりかねず、結果的に本当に人格的な行為ではなく表面的な人格主義になってしまうことが多いとベクラードは言う。See: A. J. Boekraad *Personal Conquest of Truth according to Newman* (Louvain, 1955), p. 253 また多くのキリスト者たちは宗教を良心の基礎とするが、ニューマンは良心を宗教全体がその上にあるべき土台とする。See: Bremond, op. cit., p. 333; *University Sermon* II, p. 7 “It is obvious that conscience is the essential principle and sanction of religion in the mind.”
31. *Grammar*, p. 74.
32. ジューバは良心に反する生活を送るうちに良心は暗くなり、やがてその声も聞こえなくなってしまった。(Callista, p. 35) “. . . and since the more our moral nature is improved, the greater inward power of improvement it seems to possess, a view is laid open to us both of the capabilities and prospects of man, and of the awful importance of that work which the law of his being lays upon him.” (*University Sermon* II, pp. 18—19) See also: *Proof of theism*, p. 9; *Meditations and Devotions*, p. 521.
33. *University Sermon*, p. 19. *Apologia*, p. 24.
34. *University Sermon*, p. 81.
35. *The Idea of a University*, p. 515. See also: Boekraad, op. cit. p. 23. Grave は、Henri Bremond が *Essai de bibliographie psychologic* (Paris, 1906)で提示している命題は「ニューマンの哲学全体は良心の声と神の声の根源的一致を、その神学全体は啓示の神のなかに良心の神を示そうとしている」と指摘する。(Grave, S. A. *Conscience in Newman's Thought*, Oxford, 1989), p. 3.

36. *Grammar*, p. 138. 神についてのこうした知識は生きた経験によって得られるものであるから確実ではあるが原初的且つ本能的であって反省的に分析されたものではない。それが知的な知識となるためには充分に発展しなくてはならない。
37. *University Sermon II*では、“ [Natural religion] gives little or no information respecting what may be called His (that is God’s) Personality. ” (p. 22) と言っているが、*Grammar* では「良心が感じるというのは emotional であるから、自然宗教でさえも Personal God に到達する」と述べている。(pp. 75—76)
38. *Grammar*, p. 75.
39. *Ibid.*
40. *Callista*, p. 16.
41. *Grammar*, p. 76.
42. *Ibid.*, *Parochial and Plain Sermons V*, p. 318.
43. “I feel that God within my heart. . . I cannot understand this. No, it is the echo of a person. . . An echo implies a voice, a voice a speaker. That speaker I love and I fear. ” (*Callista*, p. 314) “There are therefore, two correlative element ; the realisation of God’s presence as a living Person and our obedience to Him. The former constitutes another salient point in his first conversion, ‘ Which made me rest in the thought of two, and two only, absolute and luminously selfevident beings, myself and my Creator.’ (*Apologia*, p. 3 ; Boekraad, op. cit. p. 42) See also : Bremond, op. cit., p. 337.
44. 次のくたりはこうしたニューマンの考えを示すものと言える。We may indeed love things created with great intensiveness, but such affection, disjoined from the love for the Creator, is like a stream running in a narrow channel, impetuous, vehement, turbid. The heart runs out, as it were, only at one door ; it is not an expanding of th whole man. (*Parochial and Plain Sermons V*, p. 318)
We know that even our nearest friends enter into us but partially, and hold intercourse with us only at times ; whereas the consciousness of a perfect and enduring Presence, and it alone, keeps the heart open. (*Grammar*, p. 110)
45. *Proof of theism*, p. 15.
46. *Grammar*, p. 74.
47. “Thus conscience is a connecting principle between the creature and his Creator ; and the firmest hold of theological truths is gained by habits of personal religion.” *Ibid.*, p. 81 ; “O my only true Lover, the only Lover of my soul, Thee will I love now, that I may love Thee then. ” *Meditations and Devotions*, p. 483.
48. *Callista*, pp. 222, 293—294, 347.
49. *Callista*, pp. 222, 346.
50. *Acts 17* : 30—31.
51. *University Sermons II*, pp. 24—25.
52. ニューマンは如何なる時代の如何なる国においても、神の恵みに助けられない理性というものはなく、聖書によれば、人間には初めから神の性質と神に対する人間の義務についての啓示があったとし、どんな人に対しても、部分的にはあるにせよ神は啓示を拒まれるということとはなかった。またいわゆる異教といわれる世界でも、敬虔な人々には実際の宗教的信念があったことは彼らの書き残したものからも証明されると言う。(University Sermon II, p. 18) しかし、自然宗教と啓示宗教の違いは、自然宗教は神を教えるが神の位格という概念がないことであると言う。(p. 22)
53. *Ibid.*, p. 29.
54. *Ibid.*
55. 受肉が福音の中心であり、新約聖書は受肉した御子を通して神の姿を完全に示している。(Development of Christian Doctrine, p. 324)
56. *John 1* : 12 ; *Gal.* 3 : 26, 4 : 5—7 etc.
57. *Parochial and Plain Sermons II*, p. 222 ; *I Cor.* 3 : 16, 6 : 19 ; *II Cor.* 6 : 16 ; *Ro.* 8 : 9 ; *Eph.* 2 : 22 ; *II Tim.* 1 : 14.
58. *Ro.* 8 : 29 ; *Heb.* 2 : 11—12.
59. *John 15* : 15.

60. *John* 14 : 23.
61. *Ro.* 8 : 29 ; *Parochial and Plain Sermons* II, pp. 32, 39, 49 ; V, pp. 93, 118.
62. 神はその本性においては一つであり、この一つの神の中に三つの位格 (persona)、父と子と聖霊がある。この表現は実体によるのではなく、関係故の区別であると言われる。(Grammar 参照)ニューマンは、一つの対象物が我々の色々な感覚を通して理解されるように、福音書において現れた分ち得ない唯一の実体を持つ神も、我々の感覚を通してその多様な面や広がり互いに影響し合いながら我々の記憶や知識をも超えているが我々が作り出したものではない、我々とは別の存在のイメージを提示するとして信仰の対象である三位一体について次のように述べている。“Religious men, according to their measure, have an idea or vision of the Blessed Trinity in Unity, of the Son Incarnate and of His Presence, not as a number of qualities, attributes, and actions, not as the subject of a number of propositions, but as one., and individual, and independent of words, as an impression conveyed through the senses. (*University Sermon* XV, p. 331)ニューマンは教義の中で最も重要なものとして、三位一体論、受肉、贖いと功德、そしてその媒体であり道具としての教会をあげる。(Essays Critical and Historical I, pp. 45, 47.)
63. *University Sermon* II, p. 29.
64. Ibid., p. 24.
65. Ibid., p. 27. 哲学者、倫理学者、または道德主義者などは道德的完全性を目指し、有徳な人間になることを目的とするが、単なる優越性を尊崇する場合、人はその対象を自分の方へ引き寄せてしまう危険性がある。それに反して、啓示宗教においては、自分を越えたペルソナとしての神の存在を認めて仕えていくのであるから、人は己を離れ、謙虚にならざるを得ない。カリスタは信仰と愛によって自己中心的な態度から解放されたのであった。
66. Ibid., pp. 25—27. “The philosopher aspires towards a divine principle ; the Christian, towards a Divine Agent. ”
67. *University Sermon* II, p. 28.
68. *John* 19 : 28.
69. *University Sermon* II, p. 16.
70. *Callista*, p. 346.
71. “How nature impels us to lean upon others, making virtue, or genius, or name, the qualification for our doing so ! ” (*Historical Sketches* II, p. 42)
72. *Callista*, p. 294.
73. *Callista*, pp. 134, 224. ; *Parochial and Plain Sermons* II, p. 218.
74. *Callista*, p. 221.
75. Ibid., pp. 294—295. *University Sermon* V, p. 27.
76. *Callista*, p. 222.
77. Ibid., 211—212, 227.
78. Ibid., 292—293.
79. *University Sermon* II, p. 18.
80. Ibid.
81. *University Sermon* V, p. 34.
82. *University Sermon* XV, p. 29.
83. *Callista*, p. 357.
84. Ibid., p. 382.
85. John McCloskey III, ‘The Apostle of Personal Influence in the Work of Cardinal Newman,’ *Catholic Position Papers*, I.
86. Ibid., 4. *Callista*, pp. 207—211.
87. *University Sermon* V, pp. 28, 29.
88. Ibid., p. 35.
89. Ibid., p. 91 ; *Historical Sketches* III, pp. 87—88.
90. 人間は皆罪人である。See : I *John* 1 : 8—10.

91. 熊野義孝「キリスト教倫理入門」『熊野義孝全集第9巻』(新教出版社 1981) pp. 157—159 参照。See also :
Ro. 5: 1—11.
92. 熊野 op. cit., pp. 173, 260—261 参照。
93. Ibid., 173 参照。
94. レオン・モリス『愛—聖書における愛の研究』佐々木勝彦他訳(教文館 1989) pp. 21, 59.
95. Ibid., pp. 60, 71, 82 参照。
96. ニグレン『エロースとアガペー』岸千年訳(新教出版社 1954) p. 43 参照。
97. Ibid., pp. 43—48 参照。Gal. 5: 22.
98. 『聖書思想事典』(三省堂1987), pp. 11—14; 『キリスト教大事典』(教文館1968), pp. 188—189 参照。
99. 長倉禮子『日本におけるニューマンの受容』(荒竹出版1987), p. 28.
100. Ibid., pp. 111—112.
101. See: *Apologia*, op. cit., pp. 17—18.
102. Dessain, Stephen, *Newman's Spiritual Themes* (Veritas Publications, Dublin, 1977), p. 52.
103. Walgrave, J. H., *Newman the Theologian*, (Geoffrey Chapman, 1960) Trans. by Littledale, A. V., pp. 78—80 参照。
104. Klocker, Harry R., op. cit., 145.
105. Dessain, op. cit., pp. 44—45.
106. Walgrave, op. cit., p. 78.